



今夏行われた「ルーブル美術館展」で展示室を冒険する
アート・エデュケーターと子供たち

ただ、参加する事が大切だとわかついていても、人々のライフスタイルが多様化する中で、その多様性を受け止め合えるような「できれば義務的でない」「自然と対話ができる」といった、人々の當みの多様性を生まる」参加の場や機会があるか担保することです。美術館で行われる展覧会は、古今東西の人間が生み出した創造物を丁寧に見せながら、人間のさまざまな価値観から生まれた當みを肯定しつつ、検証する試みでもあります。その美術館の性質を活かして、美術館を拠点に多様な価値観を受けとめ合う、新しい参加の回路づくりを目指す活動を、東京都美術館がリニューアルの機会として、隣の東京藝術大学ど

ある、解決しなければ感じている事のひとつは「それぞれの人が社会生活の中で簡単に孤立してしまいやすいこと」ではないでしょうか。あの3月11日の大震災以降ニュースなどを聞くたびに、私たちはそのことを随分と考える機会がありました。人々が互いに孤立しないために重要な事は2つあります。ひとつは誰かと関わる機会を持ちつづけること、つまり「参加」をする事。そして2つ目は、参加を楽しむ感性を発展させ、今度は参加を誘う「つなぎ手」になることです。このつなぎ手となる心持をもつた人々が世の中に増えたら、私たちの不安はもう少し減っていくかもしません。

ただ、参加する事が大切だとわかついていても、人々のライフスタイルが

一番です。アートや美術館の存在意義のひとつは、人々の當みの多様性を担保することです。美術館で行われる展覧会は、古今東西の人間が生み出した創造物を丁寧に見せながら、人間のさまざまな価値観から生まれた當みを肯定しつつ、検証する試みでもあります。その美術館の性質を活かして、美術館を拠点に多様な価値観を受けとめ合う、新しい参加の回路づくりを目指す

といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めつつも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

そこでアート、そして美術館の出で、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

そこでアート、そして美術館の出で、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

ひとつの「とびら」プロジェクトでは、一般から募った約120名の市民がアート・コミュニケーター（愛称：「とびラー」）として、ユニークな活動を開催しています。とびラーは無償の活動ですが、彼らは美術館のサポートナーという位置づけではなくプレイヤーです。美術館の学芸員や大学の教員とともに、美術館を拠点として、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手になります。これまで学校と連携した授業「スペシャル・マンデー」や、い COMMUNIQUEの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

そこでアート、そして美術館の出で、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

そこでアート、そして美術館の出で、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

そこでアート、そして美術館の出で、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。



東京都美術館でアート・コミュニケーターとして活躍する「とびラー」の皆さん（前列右が筆者）

今の社会で、人々がもっとも関心ある、解決しなければ感じている

連携し、始めました。

そのひとつ「とびらのプロジェクト」

では、一般から募った約120名の市民がアート・コミュニケーター（愛称：「とびラー」）として、ユニークな活動を開催しています。とびラーは無償の活動ですが、彼らは美術館のサポートナーという位置づけではなくプレイヤーです。美術館の学芸員や大学の教員とともに、美術館を拠点として、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手といえ、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めるつとも、使い慣れた回路のなかでたたずんでしまうことがあります。

アートが促す「参加」と「包摶」

なって宿っているので、こうとする主体的なエネルギーが幾重にも重

なす。そうした展示物が何千年も前の人々の生きる力を現代の私たちまで届けることもあれば、今を生きるアーティストの生きるエネルギーを伝える事もあります。私たちは展示室で、作品を観賞だけで鑑賞していくようで、実は作品から発せられる

そうしたエネルギーをシャワーのように浴びているのかもしれません。

人々の主体的な「参加」を誘う場となり、また社会を「包摶する」、つまり人々を新しい形でつないでいく

力に必ずなると、今、とびラーと共に動きながら感じています。作品には作った人の主体的な思いが宿り、またそれを誰かに伝えようとする（東京都美術館学芸員、アート・コ